九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筑豊の炭鉱遺跡めぐり

宮崎, 太郎
筑豊炭鉱遺跡研究会

桑原, 三郎
近畿大学九州工学部

https://doi.org/10.15017/13685

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 10, pp.171-179, 1979-03-03. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

筑豊の炭鉱遺跡めぐり

宮崎太郎
桑原三郎

○現地踏査の経過

私たちは現在、福岡県筑豊炭田地域の炭鉱遺跡とそれに関係の深い諸遺跡（輸送・劇場・遊廓）の現地踏査を行っている。それをもとに今後、記録・保存を目的に主要遺跡については調査を進める予定である。現地踏査は昭和五十年より始まり本年で第四回目を迎えた。その経過は左の通りである。本稿では第四回の現地踏査に従い炭鉱遺跡の現況を報告したい。昭和五十三年三月三十日、三十一日の二日間、九大秀村教授をはじめ十六名の一行で宮崎の案内で行われたものである。三十日早朝、麻生セメント株式会社（旧麻生炭鉱事務所）前から飯塚病院のマイクロバスで出発したが、テレビ局や各新聞社の協力もあり賑かないでたちであった。

第一回（昭和五十年七月）

○工業技術資源技術試験所九州支所試験炭鉱

第二回（昭和五十一年八月）

○川艜の船頭集落（飯塚市川島・赤池町山崎）、川島船頭基地跡、舟庄屋（赤池町島津邸）、石炭御倉、貝嶋大之浦坑（露天堀・炭住）、直方石炭記念館、堀川（唐戸水門・伏越・番所跡）、江川運河

第三回（昭和五十二年八月）

○明治鉱跡（事務所・会館・炭住）、頴田町石炭積込場跡及碑、頴田町船底板の民家

第四回現地踏査（昭和五十三年三月）

第一日目

○三菱飯塚坑跡（石炭捲上機赤煉瓦基礎二基・炭住と会館）
○麻生吉隈坑跡（硬山・炭住・徳香碑・事務所）
○明治平山坑跡（石炭運輸エンドレス道目鏡橋・捲上機赤煉瓦基礎二基）
○三井山野坑跡（石西博士の研究室・測候所・炭住・慰霊碑）
○三井伊田坑跡（汽缶場・煙突・八尺立坑櫓・事務所・選炭場・炭住）
○三井伊田坑周辺（二坑捲上機基礎・三井寺石炭造の仏像）
○岩亀八幡宮（炭鉱主による奉納物多数あり）
○英彦山神宮（麻生太吉氏奉納の常夜燈二基・三好徳松氏奉納の参道石橋・三好六助氏奉納の常夜燈二基・その他三十一炭鉱が奉納）

第二日目

○古河峰地坑跡（赤煉瓦造硬山桟橋・炭住・事務所・レンガ造倉庫二棟、選炭場）
○管原神社（峰地二坑守護神社碑及祠・この神社は米暴動発祥地で坑夫大会が開かれて要求書を作成し会社に提出した）
○古河大峰坑跡（選炭場及石炭積込場・工作工場・炭住・硬山・引込線）

○豊州坑跡（水没の碑・昭和三十五年九月二十日発生し死者六十七名）
○法光寺（峰地炭坑坑夫非命之碑・横嶋炭坑殉職者弔魂碑・小松鉱業所弔魂碑）
○明治豊国坑跡（貴船神社の鎮魂碑・汽缶場・炭住・硬山）
○三菱方城坑跡（事務所・採鉱事務所・発電所・工作所・倉庫・外柵他三棟炭住・弔魂碑）
○島津邸（金田町での元舟庄屋で土蔵造りの倉も数棟残る）
○浜生神社（この神社に初めて炭坑のポンプ運転に成功した杉山徳三郎氏が明治十六年神号を奉納）
○旧伊藤伝右衛門邸
○麻生邸と負立神社
○三菱飯塚坑跡

麻生本社前から筑豊で最も美しい姿のボタ山（住友忠隈坑）の麓を通り、三菱筑豊五山（鯰田・方城・中山新入・飯塚・上山田）の一つである飯塚坑に向った。この飯塚坑は明治二十八年平恒炭坑として開坑し昭和三十六年十月閉山となった炭坑である。事業所区域内（採鉱・選鉱・製錬等）は、すべて解体されて敷地も工業団地として整地されているが、それに隣接する炭坑住宅地区には、古いスレート葺きの長屋が多く立並んでいる。そして炭住の立並ぶ中央の小高いところに白壁の大きな建物が見える。それが炭坑の会館である。

(イ) 炭鉱文化の殿堂（会館）

炭住街は事業所に接した丘陵地に形成される例が筑豊には多い。そしてその高台に周囲の炭住から見通せるような位置に炭鉱の会館が配置されるのが普通である。会館では芝居・映画そして講演などが行われて炭鉱内唯一の慰安・娯楽の場であると同時に倶楽部とともに文化の殿堂でもあった。このような倶楽部・会館は筑豊の炭鉱では明治四十年頃から建ち初めるが、炭鉱内の小学校や保育所とも厚生・文化面で重要な役割を果した。初めの頃は年に二・三回程度の興行であったが、時代が下るにつれて徐々に興行回数も多くなり、盆・正月や休日には大勢の観客で賑ったのである。いまでも会館跡の周辺には最盛期の様子を想い出す人たちは多い。

三菱飯塚坑の会館（協和会館）は、炭鉱集落内の主要通りから銀杏並木のゆるやかな坂道を登りつめた高台に建てられている。そして白壁の大きな建物が、くっきりと浮び上って見える。建築様式も特徴があり半切妻形式である。このように地置設定や建築様式にも気をくばり、炭坑夫の気分を引きたてるような配慮が感じられる。現在は町工場になっているが炭坑の人たちには想い出多い所である。

(ロ) 斜坑のシンボル（捲上機の基礎）

飯塚坑本社跡から炭住の建ち並ぶ丘陵地の反対側に赤レンガ造の大きな基礎が二基建っている。これは斜坑捲上機の基礎である。もし立坑櫓が立坑炭鉱のシンボルであるとするなら、この基礎は斜坑のシンボルといえよう。いまだにきれいな形で旧道の道沿いに二基突立っている。大きな基礎は高く三連アーチとなり外面は上方に向って若干の傾きもみられ、生産施設とはいえ注意深く造られている。炭坑を知らない人には異様な姿に見えるが、斜坑の生命ともいうべき重要な構造物である。またこの近くは遠賀川支流も流れるが、ここには石炭を川艜で運んでいた時代の井堰（天神）跡もある。

○麻生吉隈坑跡

飯塚坑から途中で麻生ゴルフ場のレストハウスで休憩して麻生吉隈坑に向う。吉隈坑は明治四十二年に開坑し、昭和四十四年閉山した麻生炭鉱最後のヤマである。昭和九年頃には総人員千六百人で年間二十万一千トンを出炭していた。そして第二次大戦後は機械化が進行し昭和三十六年の第一立坑開坑に引続いて昭和四十年には、当時わが国最大の盲立坑と呼ばれる第二立坑が完成したのである。その他、水圧鉄柱、ドラムカッター・ホーベルなどの最新の技術設備をも導入するなど徹底した合理化が進められていった。このように麻生炭鉱の全勢力を投入して完成した近代的炭鉱であった。しかしながらエネルギー革命のなか地質条件やコスト高などのさまざまな悪条件が重なり昭和四十四年閉山のやむなきに至ったのである。

当時、日本の最先端をいった近代的吉隈炭坑も大立坑を中心とする事業所区域の施設は、すべて解体されて往時の面影はない。事業所隣りにあった会館・保育所・運動場跡地もきれいに整地されている。ただその後方の丘に「徳香追慕碑」がひっそりと立っている。

しかしながら、その前方には吉隈坑の歴史を刻んだ巨大なボタ山が大きく横たわっている。

(イ) 変容するボタ山

ボタ山は炭鉱すべての象徴であり、また年輪でもある。福岡鉱山保安監督局の「ボタ山実態調査」によると、いま筑豊各地にはピラミッド形・台状・平積・スキップ状など、さまざまな形のボタ山が二五七箇所（北九州市を除く）残っている。このなかで現在最も高いのは一一〇米の忠隈坑のボタ山である。それぞれ風化したとはいえ、いまだに往時の形を留めている。

しかし、吉隈坑のボタ山は違う。刻々と変形しているのである。この巨大なボタ山（約六〇万坪）は切り刻まれるように赤く焼けた岩肌の合間をトラックが走っている。それはこのボタは岩層が大焼層であったため耐火度が高く、それに水はけもよく耐火レンガの原料や路盤材としてシャモットが採取されるからである。麻生セメント生産部の松本正照課長の話では、ボタ山は三坑と弥栄坑のピラミッド形の山をつないだ台形のきれいな山だったという。それが現在見るように鋭く変形する姿は、また石炭産業から力強く脱皮しようとする筑豊の一断面を物語るものである。

巨大なこのボタ山の裾には炭住が長く立ち並んでいた。炭住街が余りに長いので日本列島にちなんで北部の炭住街を北海道と呼んでいたのである。この炭住を見おろす後方の高台には、いまも新しい炭住が一団地残っている。戦後建てられた二戸建の炭住で各戸の規模も大きく構えも立派である。ここは永年勤続者や優秀な技術者に貸与えられた炭住であった。

○三井山野坑跡

吉隈坑より桂川町土師の明治平山坑跡を通過して稲築町鴨生の三井山野坑に向う。平山坑周辺にも赤レンガのエンドレス目鏡橋や捲上機の基礎などが残っている。

三井山野坑は明治三十一年開坑し昭和四十八年に近くの漆生坑とともに閉山した。昭和四十年六月一日ガス爆発による大災害が発生した記憶は生々しく残り、いまでも訴訟問題が続いている。閉山の四月一日以降は坑内掘りでは貝嶋の大之浦坑を残すのみとなったが、当日の毎日新聞は「全国出炭量の半分以上のスミを掘出し、明治、大正、昭和と三代にわたってわが国の資本主義産業の発展を支えてきた筑豊炭

田は事実上、歴史の幕を閉じることになる」と報じている。また山野、漆生両坑の閉山で「山野鉱は二千百七十二人、漆生鉱では五百四十三人、計二千七百十五人の離職者が同時に生れるが、家族を含めた〃離職者人口〃は約八千人を超えるといわれる」とも記されている。

この八千人の炭坑従業員やその家族が居住した炭住跡も町営住宅に大部分が建て替えられたといわれるが、それでも銭代坊の炭住をはじめ相当数の長屋が軒を連ねて蜿蜿と続いている。三井田川鉱の松原住宅とともに筑豊では原形を留める最大の炭住団地といえよう。

(イ) 「一山一家」の企業集落

一つの炭鉱の区域は広い。その区域内は炭鉱集落とボタ山とに大きく分れている。そして炭鉱集落の内部空間は、炭鉱事務所区域（坑口を中心とする採炭・運搬・選炭・事務など）を中核として、炭鉱従業指の住宅区域（炭住）と、そのサービス機能区域（厚生・文化・商業など）の三区域からなっている。住宅区域は隣棟間隔もギリギリにおさえられて整然と画一的に低層の長屋が連続しており、職員用と従業員用の住宅は区別され職階制も明確化していた。住宅区域内には、浴場・売店・理髪所をはじめ会館・倶楽部・保育所などのサービス施設が設けられていた。このように日常生活に必要な諸条件がすべて完備され、そして会社により企画・運営されるのであった。炭鉱集落は山神社も奉られて精神的な面まで配慮された家族的性格の運命共同体的な一山一家の企業集落であったのである。

三井山野鉱の炭住内には、売店・理髪所なども残り、いまでも利用されている。その界隈には炭住長屋とともに最盛期の面影をしのばれるものがある。旧山神社のある小高い丘の一角には新しい山野鉱大災害による殉職者の碑が建立されている。その下には、運動場のスタンドや広場・売店・会館の遺構がみうけられる。ここの会館は従業員倶楽部という名称であるが、明治四十年頃に設立された筑豊では初めての正式の会館建築であった。現在は古びてはいるが町工場に再生使用されている。

(ロ) 炭鉱災害医学のメッカ

山野鉱の坑口跡より低地の炭住街を越した高台に三井鉱山山野鉱業所病院跡が見える。その跡地は公園に利用されているが、その後方に二棟の建物がある。木造平屋建は三井産業医学研究所、鉄筋コンクリート造は測候所の遺構である。研究所は昭和十四年同病院内に災害医学研究室として発足し昭和十六年に研究所として独立したのである。はじめ病院の外科医であった故石西進博士は昭和二十一年より三十四年まで研究所長として就任し、炭鉱労働者の生活向上やガス爆発・落盤事故防止などの研究を続けて日本炭鉱医学界に大きな業績を残されたのであった。また坑内夫の実態調査をもとに作成された報告書は、昭和二十二年に行われた石炭鉱業連盟（経営者）と炭鉱労働組合全国協議会のわが国で初めての全国炭鉱統一賃金交渉の基礎資料となった。そして終戦直後、GHQ（連合国総司令部）は、最高顧問の栄養学者ハウス大佐を石西博士のもとに派遣し、労働量と栄養調査の末、炭鉱労働者に米の加配を決定したという。石西博士の研究室も当時のままで現存している。博士の論文に「坑内気象変化について」があるが、それらの研究とも関連するのか研究所の隣には測候所も設置されていたのである。

○三井伊田坑跡

山野坑より田川市立図書館の資料室を見学して三井伊田坑に向う。三井田川炭鉱はその『沿革史』によれば、明治三十三年三月田川採炭

組から権利を譲りうけて発足し、その後第一坑、第二坑、第三坑、第四坑が開坑した。昭和十五年には出炭量が二、〇六〇、八六三トンに達して田川の最高記録を樹立した。更に第五坑、第六坑を開坑したが終戦後の昭和二十一年には出炭量も八一九、九六六トンに減少した。当時の従業員数は一五、七一七人であった。その後昭和二十五年七月には伊加利堅坑の起工式も行われたが昭和二十七年には炭労無期限ストに突入し、その翌年は全山的に提示された企業合理化案をめぐる争議が始まり延一一三日の大争議が展開した。それ以来閉坑も相次ぎ昭和三十八年二月十六日会社は「美唄・山野・田川の閉山を含む合理化方針」を三鉱連に提示し数次に亘る交渉のすえ、六月二十八日諒解点に達し、七月一日歴史的調印を終えた。そして昭和三十九年三月二十日閉山して三井田川鉱六十四年の歩みを閉じたのである。

三井田川鉱の伊田坑は、開坑時はそのままの名称であったがその後第三坑と改称され、そして昭和三十五年に第三坑と伊加利坑を結合して再び伊田坑と改められたものである。そのためか伊田坑を三坑と呼ぶ人たちが多い。この伊田坑跡には煙突や立坑櫓をはじめ汽缶場・発電所・選炭庫などが残り、正門近くの事務所と機械工場は現在「田川三鉱ブロック工業株式会社」の施設として利用されている。閉山後十有余年を経過して廃墟同然の姿に変ってはいるが、事業所内全体の状況からは日本初期の近代的炭鉱の配置形態を連想されるのである。三井田川鉱業所一覧図(写真)は閉山前の状況を図示したものである。現在、三井石炭鉱業株式会社田川事務所(所長原毅氏)所長室に保存されている。

(イ) 二本煙突と八尺坑櫓

現在、この伊田坑跡地は石炭記念公園の計画が実行に移されつつある。そのなかに二本煙突と八尺坑櫓は保存されるという。第一堅坑(八尺櫓)は明治四十二年、第二堅坑(四尺坑櫓)は明治四十三年に竣工した。それ以来、最後の閉山まで回転し続けてきたもので、明治期の三大堅坑(三菱方城、日鉄二瀬、伊田坑)のなかで唯一つ現存する貴重な遺構である。この堅坑の大滑車は八尺坑櫓のみが二本煙突とともに草むらのなかに高くそびえて立っている。ここは「炭坑節」発祥の地としても知られて、二本煙突の合間からは「一山、二山、三山越え…」の香春岳を真正面に見ることができる。

赤レンガ造の二本煙突は三井石炭鉱業田川事務所に収蔵されている図面によれば高さ四五・四五米で下部の直径が五・四五米という大きなものである。ドイツから輸入された耐火レンガが使用されたイギリス積の煙突である。いま宮崎が各炭鉱にあった煙突のレンガを収集しつつあるが、それらの形状から推察すると、扇形と軽く屈曲した二種類の異形レンガで築造されたものと考えられる。今後は構造上の規制でこの種のレンガ造煙突は建つことはないであろう。日本炭鉱初期の大堅坑時代の記念物として貴重である。

(ロ) 三坑銀座

伊田坑跡の正門から炭住が続いている。ここの炭住の奥に入りこむと「三坑銀座」と呼ばれていた広い通りがある。この通りが炭住街の中心であり、また人々の出会いの広場でもあったろうと考える。通りに面した長屋には「銀座東十一」などの古びた標札もみられる。中央部には浴場も残り理髪所と売店は営業を続けている。炭鉱最盛期は入浴や買物をする人たち、また坑内から上がった坑夫さんたちで賑いのあった通りであろう。ここの炭住は古い形式のもので六軒長屋が多い。桟瓦葺きの屋根で各戸の南側に突出して設けられた便所は低いスレート葺きの屋根である。炭住は昭和八年頃に共同便所が廃止されて住宅改善が行われているが、その時期に改造された炭住であろう。この炭

住街のはずれには筑豊では少ないといわれる二階建の古い炭住長屋も各棟ごとに設けられた共同便所とともに残っている。

炭鉱住宅の変遷には興味深いものがある。石炭記念公園内にも坑夫納屋・坑夫長屋・坑夫社宅・従業員社宅と年代順に復原保存したら面白いと思う。

○三菱方城坑跡

第一日目の夜は添田町英彦山にある麻生寮で懇親会も開かれて有意義な一夕を過した。翌日早朝、英彦山神社を出発して古河炭鉱に向った。添田町の古河蜂地坑跡では元蔵内炭坑時代の「硬山桟橋」が珍しい。川崎町の古河大峯坑跡には「石炭積込場」の遺構がきれいな形で残っている。その他豊州炭坑の「水没の碑」をはじめ炭坑と関係のある「社寺」など数多くの遺跡を見学したが、それらは今後改めて報告する機会もあろうと思うので、第二日目の現地踏査は三菱方城坑跡のみについて報告する。方城坑は明治三十五年に開坑し昭和三十年に閉山した炭坑で現在その事業所内跡地は九州日立マクセル株式会社として再生使用されている。炭鉱遺跡の保存例として興味深いものがある。

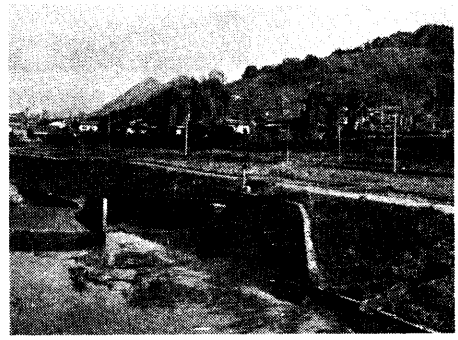
(イ) 珍しい赤レンガ造の炭坑跡

開坑当時、三菱方城坑はすべて赤レンガ造の建造物で構成されていた珍しい炭坑である。いまでも整然と配置された事業所区域内の主要建築の外廓は、当時のままの姿で残されている。三菱では方城炭坑の建設にあたり、まずレンガ工場を現地に建てたという。事業所内の本社事務所と採鉱事務所には、ペジメントの丸窓、アーチ、軒蛇腹の手法が用いられた建築様式で炭坑施設としては味わいのある建物である。日本の工場建築として著名なものに明治二十三年に建てられた札幌麦酒第二工場が札幌ビール園内にあるが、単調な壁面に適度な抑揚をつけた点などは類似した建築様式である。三菱方城坑では建築にも相当力が注がれている。現存する七棟のレンガ造建築の外廓は、そのままの形ですべて日立マクセル工場として再生使用されている。新しく建てられた施設とも調和しており、炭鉱遺跡の保存例として興味深いものがある。

方城坑跡の近くに方城町立図書館が新築されている。その郷土資料室には昭和二十九年当時の方城坑の全景写真や立坑櫓の写真などが展示されている。

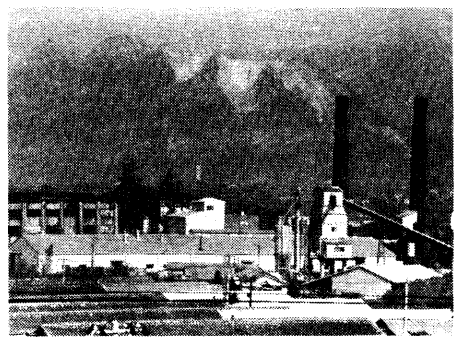
付記　写真は麻生セメント株式会社編集室栗田氏・近畿大学伊藤氏による。

①三菱飯塚坑、会館跡



②三菱飯塚坑跡、捲上機基礎

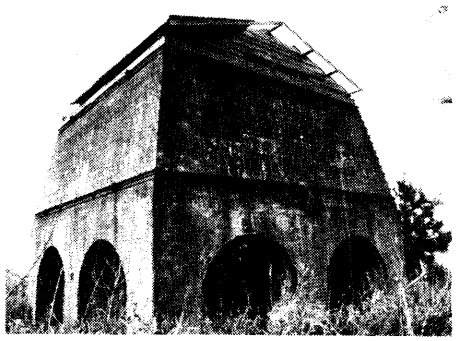
③三井山野坑、石西博士の研究室と測候所跡



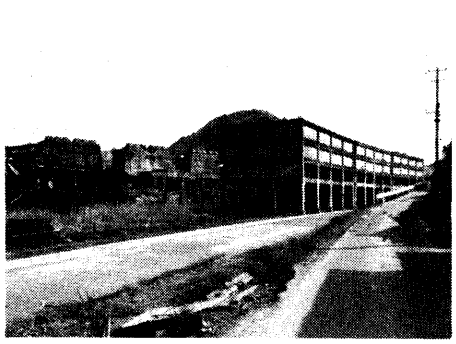
④三井伊田坑跡、二本煙突と八尺櫓

⑤三井伊田坑跡、三坑銀座

⑥古河峰地炭坑跡、硬山桟橋

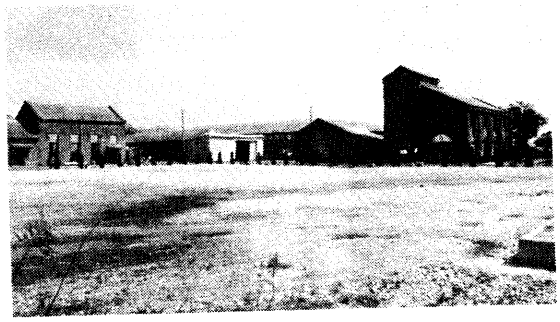


⑦三井二坑跡、捲上機基礎

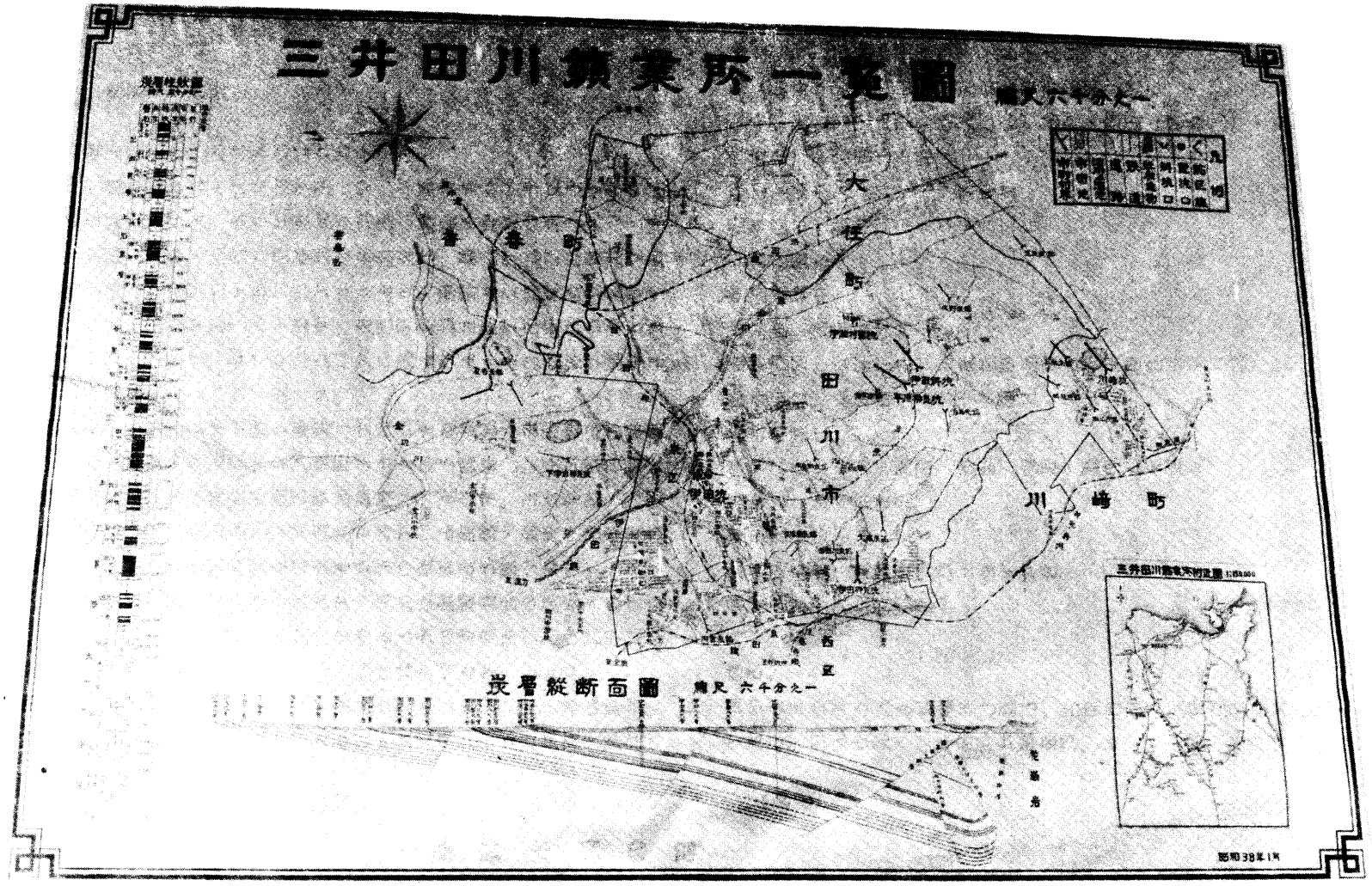


⑧古河大峯坑跡、選炭場と積込場

⑨ 麻生吉隈坑跡ボタ山



⑩ 三菱方城坑跡


三井田川鑛業所一覽圖
縮尺 一之六千分之一
大任町
田川市
川崎町
香春町
炭層縱斷面圖
縮尺 一之六千分之一
昭和38年1月